

小論文指導の制度的確立に向けて

—「高校教養科」設立の提唱—

第一学習社 長岡裕子

キーワード：小論文 大学入試問題 言語活動 高校教養科

0. はじめに

大学受験に「小論文」と名づけられた論述試験が登場してから、既に30年近くの歳月が流れている。私は教育出版社の業務に携わる中で、その入試の潮流を受けて、20年にわたって小論文指導の分野で仕事をしてきた。さらに最近数年は、個々の高校の依頼を受けて、教員や生徒対象の指導講演に当たることを専らとしている。

その講演依頼は多岐にわたり、それぞれの高校の進路進学事情、小論文指導の取組状況により千差万別である。そこではまた、多くの教員の小論文指導上の疑問、困惑についての質問や相談を受けている。高校教員にとって、本来の担当教科指導に加えて、入試科目であるためにおこなわざるを得ない小論文指導は大きな負担であり、その目的意識も指導方法もさらには評価基準までバラバラなのである。

この現状に至った原因は、「小論文」が、いつまでたっても大学側の発信した入試のための一形式にとどまり、高校側は明確な指導の目的も手段も持ち合わせないからであると考えている。

しかし、小論文指導が入試対策としての目的以上に、高校教育においてこそ重要な意義と可能性を持つという私の実感は、問題分析や生徒指導に関わるほどに強まっていった。私は、小論文入試問題に表れている大学側の受験生に求める力とは、自己内省力であり、社会的視点であり、本質を見つめる哲学的姿勢であると捉えている。また、論理的思考力であり、自己発信力であるともいえるだろう。それは、学問に向かう力であると共に社会に出て行く力となる。言い換えれば小論文入試問題は、国際化、情報化に代表される現代の急激な変化の中でその社会に参加し、その社会を創造していく力を若者が身につけるための格好の教材としての意味を持つのである。

一方、現在非常勤講師として二つの高校の小論文指導に携わる中で、その生徒の「書くこと」の

現状が、意識の未熟さと論述の不慣れさゆえに、大学の求めるものとかけ離れていることにも気付いている。それは現状の高校教育が、社会の変化に即応して生きていかなければならない現代の若者を育成することに対応できているかという問題提起につながる。社会の動きに伴う生活環境の変化は当然生徒にも影響し、心理や行動に表れ、それがいつそう大学の求めるところから遠ざけているという側面もあるなかで、今、小論文指導という観点を持って高校教育を再考することが有用なのではないかと考える。

以上のような、今日までの実践経験から生じた問題意識に基づき、小論文指導に対する認識と今後のあり方を見直していく。

1. アンケート調査について

1-1. 調査の目的

上記研究動機から、小論文教育の意義と可能性を明確化し、高校における必須の教科としての認識を促し、その制度的確立に向けて研究していくことを目的としている。

従来、入試小論文対策は文章指導の守備範囲として国語科教員に押し付けられてきた傾向があったが、小論文入試を実施する大学、専門学校の増加に伴い、また入試テーマが如何に多岐にわたるかということへの認識が広がるにつれて、LHR、総合的な学習などの時間を利用してさまざまな教科の教員がその指導に携わるようになってきた。

私はこれを好機として、小論文指導に対する高校教育全般にわたる広範な視点に基づいた理解が深まり、その教育的意義への認識が浸透し、高校側から小論文指導の制度的確立を望む声が高まっていくことを期待している。

さらに、大学側の求める小論文の力と意識を高校側が共有して指導していくことによって、大学と高校との教育的連係を実現していくことが出

来ればこの上ない。

1-2. 高校における小論文指導の実態調査

以上のような研究目的の端緒として、高校において小論文指導がどのようにおこなわれているかという現状認識のためにおこなったアンケート調査を提示し、そのデータを分析し考察する。

(1) アンケート調査の概要

- 目的 小論文指導の取組状況の把握
 調査用紙発送日 2010年5月中旬～6月末
 発送方法 郵送
 あて先 各高等学校長
 発送部数 3413
 (北海道から沖縄まで28都道府県にわたって)
 回収部数 599
 (回収率 17,6パーセント)
 質問項目 A 指導開始時期
 B 指導実施計画
 C 実施内容
 D 年間指導時間 (各学年)
 E 実施にあてる時間 (各学年)
 F 指導教員 (各学年)
 G 指導目的 (各学年)

図1はアンケートの実際である。

図1

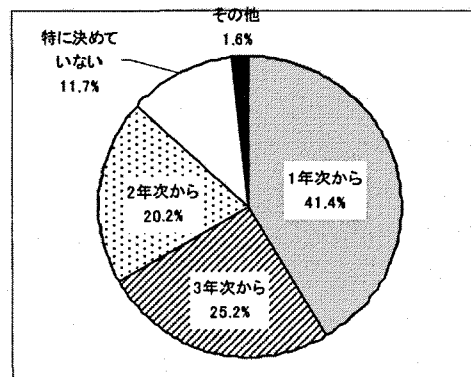
回答欄	選択肢
A. 開始時期 []	1. 1年次から 2. 2年次から 3. 3年次から 4. 特に決めていない 5. その他()
B. 実施計画 []	1. 3年間の計画作成 2. 各学年団で計画作成 3. 受験に必要な生徒のみ 4. 特に決めていない 5. その他()
C. 実施内容 []	1. 教員による授業形式 2. 模試受験 3. 教材、資料による自主学習 4. 特に決めていない 5. その他()

D. 年間実施時間数 [1年] [2年] [3年]	1. 3時間以内 2. 4～9時間 3. 10～15時間 4. 16時間以上 5. その他()
E. 実施にあてる時間 [1年] [2年] [3年]	1. ロングホームルーム 2. 総合学習 3. 国語科 4. 特に決めていない 5. その他()
F. 直接指導される先生 [1年] [2年] [3年]	1. 国語科の先生 2. 担任の先生 3. 進路指導の先生 4. 特に決めていない 5. その他()
G. 実施目的 [1年] [2年] [3年]	1. 入試対策 2. 進路指導 3. 生きる力、考える力の育成 4. 文章力、表現力の養成 5. その他()

(2) 調査A～Cの結果と分析

以下はA～Cの項目の回答を単純集計した結果である。

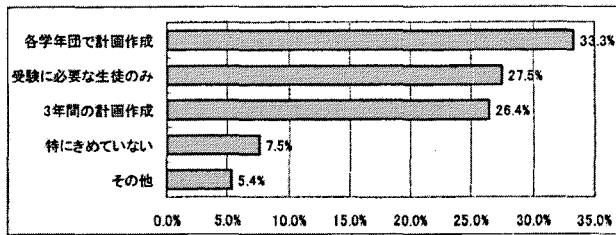
図2 A. 開始時期



Aは小論文指導を開始した時期をあらわしている。1年次からスタートする高校が40パーセントを超えている一方、入試の迫る3年次から指導を始める高校も25パーセント以上ある。特に決めていないという学校が1割を超えていて、そこでの実態が定かでない点も注目すべきところであろう。しかし、本統計上の86,8パーセント以上

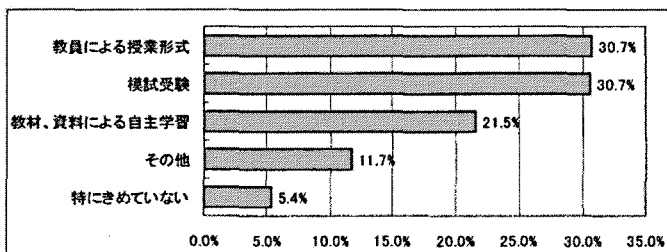
の学校が小論文指導を実施していることは明確になった。

図3 B.実施計画



Bではどのような実施計画の下に指導を進めているかを聞いている。「受験に必要な生徒のみ」の割合が、Aの「3年次から」の割合と近い数字を示している点で符合している。「3年間の計画作成」をもって生徒のステップアップを図っている学校より、「各学年団で計画作成」という学校が多い点では、学年団相互の連係が図られているのかという疑問が残る。

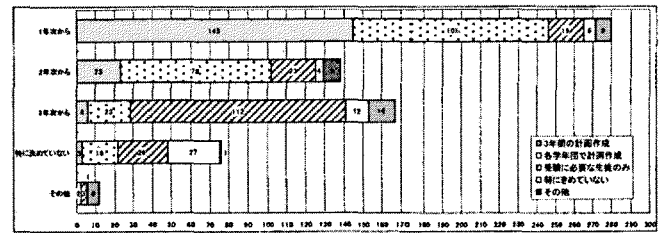
図4 C実施内容 (複数回答あり)



Cは指導の具体的内容を示すものである。教員が指導に当たっている割合が30パーセントを超えているが、クラスや学年単位の授業という形と、受験に必要な生徒対象の個人指導という形との両者が考えられる。一方、外部講師による小論文ガイダンスや模試受験にとどまっていると思われる学校も少なくない。

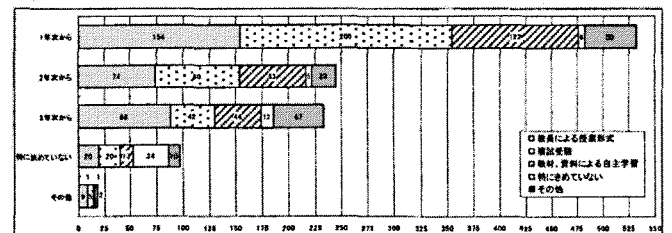
ここで、「A 開始時期」について、「1年次から」「2年次から」「3年次から」それぞれの回答を得た学校の「B 実施計画」「C 実施内容」の回答をクロス集計してみる。

図5 A 開始時期—B.実施計画 クロス集計



1年次から小論文指導をしている学校の多くが「3年間の計画作成」「各学年団で計画作成」をしていることが分かる。2年次からでは「各学年団で計画作成」が最も多く、3年次からスタートの学校の多くは「受験に必要な生徒のみ」を指導対象としている。

図6 A 開始時期—C.実施内容 クロス集計 (複数回答あり)



「教員による」「模試受験」「自主学習」は、それぞれ「主に校内指導」「主に外部指導」「主に家庭学習」と分類することが出来るだろう。どの学年で指導をスタートした場合でも、それらが比較的均等な割合であることが興味深い。3年次から開始の学校では、受験対策として教員による個人指導の割合が高くなっていることが推測できる。

(3) 調査A～Cの考察

この段階で図6までの分析、考察を試みる。

①小論文指導の「開始時期」において、41、4パーセントを占める「1年次から」と答えた学校では、その50パーセント以上が3年間の「実施計画」を作成している。「実施内容」については、複数回答により図6は図5の約2倍の回答数になっていることから、「教員がかかわって学校内の学習時間を用いて指導する」「多くは外部業者に

よると推測できる模試受験（ガイダンス、指導講演付属）「多くは外部業者作成の教材、資料による自主学习」が並行しておこなわれていると推測できる。しかしここからは、3種以上の方法を併せ取り組んでいる学校がある一方で、外部模試を受験して添削指導を受けるだけ、あるいは外部からの教材を配布するだけという状況も少なくないことを読み取っておかなければなるまい。

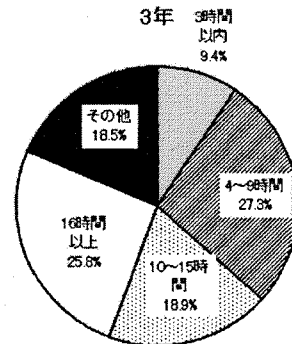
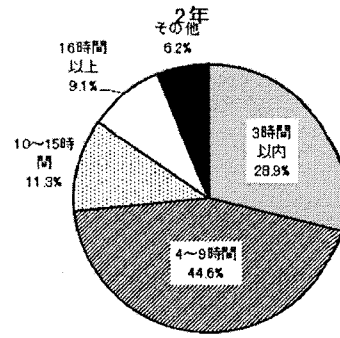
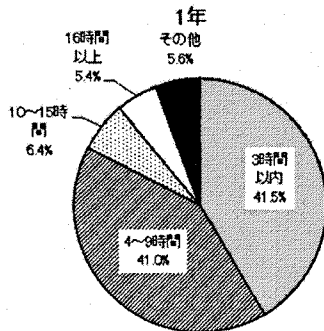
②「2年次から」指導の学校は20、2パーセントであることから、2年段階で60パーセント以上の高校が小論文指導を開始していることが分かる。その多くが「各学年団で計画作成」をして指導に当たっているものの、「実施内容」については、「1年次から」の「実施内容」の状況に殆ど変わらないといえる。

③一方、今回の回答の25、2パーセント、つまり四分の一の高校が「3年次から」小論文指導を開始しているという現状が明らかになった。3年になってのスタートということは、図5が示すように「実施計画」は「受験に必要な生徒のみ」であり、図6「実施内容」で「教員による」が最も多いのも個人指導が中心であろうことは想像に難くない。模試も自主学习も並行されているのは、もちろん受験対策だからである。

(4) 調査D～Gの結果と分析

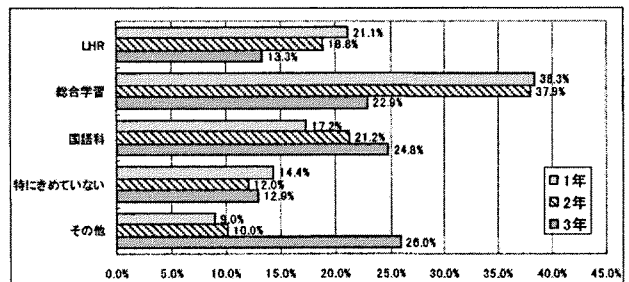
ここからは、各学年の指導状況について回答を求めたデータを提示していく。

図7 D年間実施時間数



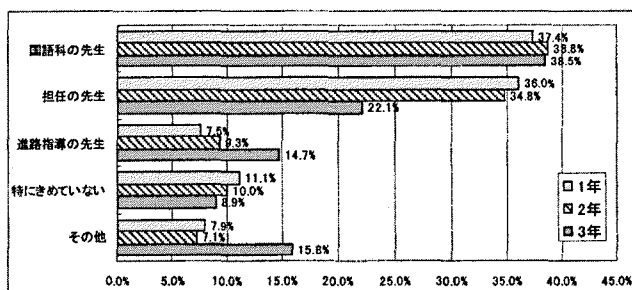
Dは、各学年で小論文指導にどれだけの学習時間を費やしているかを聞いている。1年では、3時間以内が最も多く、図4の解説や①で指摘した、模試受験やガイダンスのみにとどまる学校も多いことを示唆している。3時間以内とは、最大各学期に1時間である。4～9時間以内も殆ど同割合で、年間9時間以内の学校で82、5パーセントが占められていることがわかる。2年での実施時間は4～9時間が最も多いものの、3時間以内が3割近くある一方で、10時間以上の学校も2割を超えて、指導状況の格差は広がっている。3年では10時間以上指導の学校が45パーセント近くに上るが、図6までの分析によるように、「受験に必要な生徒のみ」の「個人指導」が多くを占めることが推測され、それはつまり、3年になったらまったく小論文を学習しない生徒が少なくないことを意味する。

図8 E実施にあてる時間 (複数回答あり)



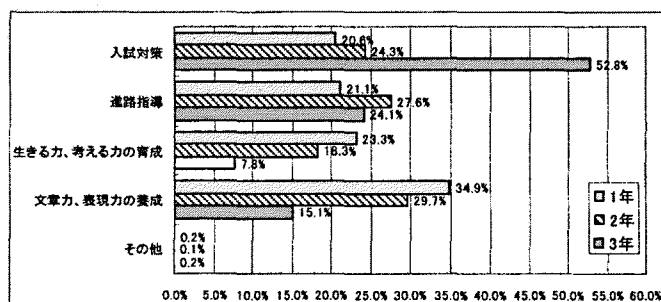
Eでは、小論文指導の実施にどのような教科時間を当てているかを聞いている。1、2年では、ゆとり教育が生んだ「総合的な学習の時間」がもっとも多用されている。この時間があつたからこそ、小論文指導がここまで定着してきたといえる。3年では国語科の時間に最も多く指導されているが、殆どの高校で3年は進路別に教科時間を割り当てていることと図7の分析とをあわせ考えると、教科時間の中で小論文指導を受けている生徒の割合がどの程度のものであるか推察されるであろう。

図9 F 直接指導される先生 (複数回答あり)



Fの小論文指導教員については、全学年にわたって国語科教員が最多という結果がでた。「小論文は国語の守備範囲」とされている現状が如実になったわけである。1、2年で国語科教員に近い割合で担任教員が指導に当たっている点は、図8のLHR、総合的な学習の時間が用いられている点と符合する。3年で進路指導の先生やその他が多くなっているのは、入試間近になって各教員に個人指導が割り当てられるようになるからと言えるだろう。

図10 G 実施目的 (複数回答あり)



Gの実施目的に挙げた項目範囲では、1、2年は

比較的平均した目的意識のもとに指導されているといえる。一方3年になると、当然のことながら入試対策が群を抜いている。生きる力、考える力の育成などについて意識する余裕はなくなっているということであろうか。1、2年で文章力、表現力の養成を目的化する意識がもっとも強くなっている点は、図9の国語科教員が最多である点と符合する。

1-3. 本調査により表出した問題点

以下では、今回の高校小論文の指導の現状を示すデータを総合的に分析し、表出した問題点の考察を試みる。

今回の回答集計が明らかにした点は、まず何より高校の小論文指導が手段も目的もいかに不統一かという点であり、不統一なままに多くの学校で実施されているという事実である。その原因は、「小論文」が「大学側の発信した入試のための一形式」という定義付けしか持たないまま長い年月を経て、その間にさまざまな解釈を持つに至った点にあると考える。

一部の高校や教員の間では「生きる力、考える力の育成」につながるとして3年間の計画の下に全教員によって指導すべきものと位置づけられ、一方では、あくまで入試対策として高3の該当する生徒だけに施すべきと扱われ、別のところでは、文章力、表現力によって評価されるものとして国語科教員にゆだねられているという現状は、前述した小論文の教育的意義に比して大いに問題視すべきものであろう。

さらに、各高校においては教員の移動、役職や担当の変更などから、小論文についての解釈の異なる教員が指導の中心になることによって方針も方法もたびたび変化しているという事情もある。

また、大学側は、かくも長きに渡り小論文入試をおこないながら、そこにどのようなメッセージを込めているかを十分に伝えてきたのかという疑問も感じる。

つまり、現状の「小論文」は全国の大学と高校の狭間に横たわり、その教育的意義の大きさを十分に認識されないまま、解釈を幾通りにも持ちながら教員や生徒を悩ませる正体不明なものに育ってしまったのである。正体不明であるがゆえに、

すべての項目にわたって決して少なくない割合の「特に決めていない」という回答が存在するのであるかもしれない。

1-4. 高校の現状が示唆する課題

上記の調査から、高校の現状の一端を示すことができたので、次の展開としては、入試問題などから大学の出題意図を探り、現在大学と高校にどのような齟齬があるか、将来的に大学と高校はどのように意識を連係して行くべきかを追究していく。

その上で、高校教育における小論文の意義と可能性を明確化し、新たな名称を与えたいと考えている。入試科目としての「小論文」から脱却させ、高校教育としての意識統一を図るためには、高校教科としての名称を考え命名すべきであろう。

私が今考案しているのは、高校における教科全般をつなぎ、知識と意識を下支えする役割を持つ「教養科」としての位置を与えることである。

おりしも、成人年齢引き下げの論議が歩を進めている。18歳を成人とする日が来れば、高校は卒業と共に参政権を持つ成人を送り出す責を担うことになるのである。そのための成人教育、社会人教育としての「教養科」を、大学の「一般教育」と連係させ、さらに学問への入り口とすることも可能なのではないかと考えている。

2. 大学入試小論文の分析

2-1. 入試小論文を分析する

小論文指導を入試対策としての枠内に収めるべきでないと考える一方で、前述したように「大学入試課題は国際化、情報化に代表される現代の急激な変化の中で、その社会に参加し、その社会を創造していく力を若者が身につけるための格好の教材としての意味を持つ」と私は考えている。

それを論証する一つの方法として、大学入試の小論文課題を具体的に引き上げ、そこから大学側の出題意図をどのように読み取るべきか、その意図を知り、高校教育としてどのように受け止めるべきかを分析し、その教材としての有用性を明らかにしたい。

今回例示した入試小論文課題は、「広島大学教育学部第一類（学校教育系）初等教育教員養成

成コース」の、2008年度、2009年度、2010年度にわたる3年間の「AO入試」である。同大学、同学部、同コースの問題を3年分連続して見ていくことによって、大学側の出題意図をより明確に認識できるのではないかと考え、取り上げたものである。

2-2. 大学入試課題の視点分析

以下の課題に出題者（大学側）はどのような意味を込め、その解答に何を期待し、どのような点を評価するか、「出題の意図」を次のように探る。

広島大学 教育学部第一類（学校教育系）初等教育教員養成コース

2008年度 AO 入試

あなたは、あなたが今まで受けてきた教育をどのように評価するか。小学校、中学校、高等学校以降の3期に分け、自分で観点を設定して評価せよ。そのうえで、あなた自身が理想とする小学校教育の姿を構想せよ。

制限時間：150分、制限字数：800～1000字は3課題共通である。

問題分析

設問の主旨①—受験者の受けてきた教育の評価

①の条件—「小学校、中学校、高等学校以降の3期に分ける」「自分で観点を設定する」

設問の主旨②—受験者が理想とする小学校教育の構想

上記の主旨に答えるうえで要求される考察の視点

A, 教員志望者として当該の学部で学ぶにあたり、「教育とは何か」という本質的命題に対する学問的研究的視点を持っているかを問う。

B, 受験者自身の体験的自己分析とともに、その経過における「教育」を、「評価する」という方法で客観的に分析できるかを問う。（自己について語りながら教育を客観化普遍化してとらえる視点）

C, 問題点を羅列することなく、小中高の教育を一貫した観点から論理的に述べる。

D, 自分という一人の人間の成長過程を通して小

中高の教育を連携してみることによって、小学校教育の問題点、あり方を導き出す。

E, 「小学校とは何か」という考察を踏まえて、受験者が教育の理想を持っているかを問う。

F, 以上のことを論じるに適切な論理構成力を持っているかを問う。

G, 以上のことを論じるに適切な表現力を身につけているかを問う。

2009年度 AO 入試

「少子化」が進んでいる。「少子化」は社会的な問題点ととらえられており、学校にも影響を与える。児童の数が減っていくと、どんなことが問題(デメリット)となるだろうか。反対にメリットはないだろうか。また、デメリットをメリットに変えていく方法はないか。あなたの考えを書け。

問題分析

社会的な前提条件—「少子化」が進んでいる。「少子化」は社会的な問題ととらえられており、学校にも影響を与えている。

設問の主旨①—児童数減少のデメリットとメリットの分析

設問の主旨②—デメリットをメリットに変えるアイデア

上記の主旨に答えるうえで要求される考察の視点

H, 「少子化」の進む現状と背景を認識し、社会問題としてとらえる視点。

I, それを志望する分野である「教育」や「学校」に与える影響として分析する視点。

J, 一方的な見方にとらわれず、児童数の減少をメリット、デメリットの両面からとらえて考察する客観性を問う。(一つの現象を対極的に、あるいは多面的にとらえる視点)

K, 児童数の減少によって生じるデメリットをメリットに変えるという教育現場での発想と実行の資質。

F, 以上のことを論じるに適切な論理構成力を持っているかを問う。

G, 以上のことを論じるに適切な表現力を身につけているかを問う。

2010年度 AO 入試

小学校教育に関する現代的な課題を、次の四つのキーワードを全部使って記述し、その課題に対するあなたの考えを述べよ。

キーワード; 教科、学級、担任、小中一貫

問題分析

設問の主旨①—小学校教育における現代的な課題の設定

設問の主旨②—「教科、学級、担任、小中一貫」という四つのキーワードをすべて用いて①で設定した課題を考察する。

上記の主旨に答えるうえで要求される考察の視点

L, 現代の社会背景を踏まえて小学校教育の課題を考察できるかを問う。

M, 四つのキーワードが与えられていることで、自由に課題を設定するのではなく、ある程度論点は絞られていることを認識し、適切な課題設定が出来るかを問う。

N, 四つのキーワードによって、論点とともに論理構成もかなり限定されることを認識する。

(例・・・設定する課題として「小中一貫の是非」を挙げた場合—課題を設定し今日なぜそれが問われるかを社会背景から論証し、自分の立場を提示する。さらにその立場を論証し、そのためには「教科、学級、担任」をどうするか、あるいはどうあるべきかを論じる。または、その逆論理)

G, 以上のことを論じるに適切な表現力が身につけているかを問う。

さらに、以上 A~N のように分析できる視点が要求される大学入試小論文課題を解答していくためには、受験者にどのような考察力が必要かを考えていきたい。

I A,E,の考察—本質を探ろうとする哲学的姿勢

II B,の考察—自己を内省し認識するメタ認知力

III B,I,J,M,の考察—客観的思考力

IV C,D,F,N,の考察—論理的思考力

V E,G,K,の考察—自己発信力

VI H,Lの考察—社会的視点

これらは、私が数年にわたって多数の入試小論文課題を分析していく中で、大学側が小論文受験生に求める力であろうと推測し、認識していたものと一致する。多くの課題は、自己の人生や、現代社会や、学問への姿勢としての物事の本質などに向き合い、見極める力をこそ問うのである。それはすなわち、ここまで述べてきた、大学発信の小論文課題が高校生に対して教材としての意味を持つとする持論の証明の一端となるのではないかと考えている。

しかし、高校生の現状を見ると、ここで求められる視点は圧倒的に不足しているといわざるをえない。これについては時を変えて改めて資料提示しながら論じる機会を持ちたいが、つまり、大学側が意図し、求める「小論文を書く力」こそが、若者が現代に学び生きていく力であるにもかかわらず、現状の高校教育ではそれが十分に果たせていないというところまでは言及しておきたい。繰り返し、現状の高校教育が、社会の変化に即応して生きていかなければならない若者を育成することに対応できているかと問題提起せざるをえないのである。

2-3、大学の視点と「高校指導要領」との齟齬

では、これらの力を高校教育としてどこでどのように指導し、育成できるか、しているかと考える中で、まず、「高等学校指導要領」(平成21年3月)では「小論文」をどのように位置づけているかを調べるために「小論文」の語を検索してみた。その結果は、「第3章 主として専門学科において解説される各教科」の「第13節 英語」「第3 英語表現」の最後の項目として「(9) 小論文」と1件あるのみであった。その「内容の取扱い」についても小論文に対する特別な記述はない。これでは、大学入試の論述試験として既に30年の歳月を経た「小論文」を、つまり大学側の意図を、「高校指導要領」はどのように受けとめ、さらには大学と高校との教育目的の連携をどのように考えているのか、という問題視を禁じえない。

次に注目したのは「言語活動」という文言であった。小論文が「書くこと」である以上、それは

「言語活動」として指導し、「言語活動」のなかで育成していくべきであろうと考えるからである。その「言語活動」について「高等学校指導要領」では、

まず「第1章 総則—第1款 教育課程編成の一般方針」に、

「1 一略—課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努力しなければならない。その際、生徒の発達段階を考慮して、生徒の言語活動を充実するとともに、一略—」とあり、続いて「第2款 各教科・各科目および単位数等」には、「1- (1) 各教科・科目等の指導にあたっては、生徒の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、一略— 言語に関する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図るうえで必要な言語環境を整え、生徒の言語活動を充実すること。」とある。

では、その「各教科・科目」でどのように「言語活動」を充実するよう表記されているかという点と、「高等学校指導要領」全体を検索した結果、「言語活動」という語句は全47件中、前述した「総則」の2件以外では「第2章」「第1節 国語」の中で9回、同「第8節 外国語」の中で27回を数えるにとどまった。

ここからは、「高等学校指導要領」の言う「各教科・科目」とは、国語と外国語のみのことなのか、さらに、はたして「言語活動」は国語と外国語の中だけで充実させればよいのかという疑問を抱かざるを得ない。

「言語活動」の持つ意味は広く、かつ深く、人間の営みすべてに関わるものであり、生徒にとっては高校教育の全教科につながるものであるはずである。それは、個々の生徒が社会で生きていく力としての「言語活動」に成長させていくべきものであり、広くは社会を形成していく上で求められる「言語活動」になるべきものである。それは、高校教育の全教科を通して、全教科の指導者によって育成されるべきといえるのではないか。

大学側から求められながら、高校教育として、また高校生の現状として不十分な前述の「2-2 I~VI」の視点や力が「言語活動」教育の中で指導されるものとして論を進めるならば、大学入試

課題としてほぼすべての学部が「小論文」を出題し、その力を求めていることから、「言語活動」は高校の全教科を通して指導していくべきものであることが立証できる。

だからこそ、全教科につながる「言語活動」教育の場を設立し、高校教育にその体制を構築していくことの必要性は急務と考えるものである。

3. まとめとこれからの展望

3-1、現状の問題点の整理

ここで、1、2を通して振り返り、現状の「小論文」にまつわる問題点を整理しておきたい。そこには、高校側、大学側の教育姿勢にとどまらず、文部科学省や生徒自身のあり方にも関わる問題がうかがえる。

・すでに30年の長きに亘って大学入試問題として出題されている「小論文」に対して、いまだ高校側は統一的な指導体制を持たず、全国の高校で小論文指導はおこなわれているものの、その目的意識も方法もバラバラであること。

・「小論文」出題の大学側の意識は高く、高校生自身の生き方に対して、あるいは社会や学問への姿勢として、大きなメッセージ力を持つものであるにもかかわらず、「入試」という形でしかその意識を伝えず、高校教育に明確な示唆を与えてこなかったこと。

・文部科学省は「高等学校指導要領」に見る限り、「小論文」出題を通して30年に亘って発せられてきた大学側からの視点に対して、高校教育における小論文教育の意義と可能性を明確にせず、その指導のあり方を曖昧、かつ不明なままにしていること。

・高校生自身は、大学側の「小論文」出題に対する自己や社会に対するメッセージを自分で読み取り受け止めようとせず、入試対策として高校側に依存してきたこと。

これらの齟齬は総じて、長い年月「誰も歩み寄らなかつた」ことから生じたといえよう。

私の20年以上の小論文とのかかわりの中で、高い見識を持ちその指導に努力されている高校の先生方や、課題から大学の意識を読み取り自らその領域に近づいていこうとする高校生たちを

見る機会は少なくなかつた。しかし、それらは個人的な頑張りの域をでず、広がりや関係を持たぬまま、「小論文教育」としての実りにつながらなかつたのである。

今、先に挙げた四者が歩み寄り、現在の高校教育に抜け落ちたものを埋めるべく、大学側との関係の下に、高校に新たな「小論文教育」の体制を作っていくべきだと考えている。

3-2、「高校教養科」設立の提唱

いまだ論証のいたらざる点を多とすることを承知の上で、ここで結論を提示させていただくならば、大学側の求める「小論文」が持つ視点教育の場として「高校教養科」設立を提唱する。

「1-4」で、「入試科目としての小論文から脱却させ、高校教育としての意識統一を図るためには、高校教科としての名称を考え命名しなければならない。一略一 高校における教科全般をつなぎ、知識と意識を下支えする役割を持つ「教養科」としての位置を与えるということである。一略一 成人教育、社会人教育としての教養科を、大学の一般教育（教養）と関係させ、さらに学問への入り口とすることも可能なのではないかと述べた。

「高校教養科」の担う小論文教育は、入試対策としての小論文指導ではなく、「2-2 I~VI」で示したような大学側の人生や学問や社会に対峙する視点を受けとめる高校教育としてのものであり、何より学習者自身の人間的、精神的成長に、さらには学力の向上につながるものとして考えていかなければならない。

具体的にどのようなものかの一端を表すなら、私見であるが、ここまで述べてきた「言語活動」を中心としたカリキュラムによる、「言葉学習」といえるものをイメージしている。「2-3」で述べたような言語活動の重要性、「3-1」で提示した生徒の現状の中で、この「言葉」をどのように指導していくべきかに今日まで私は多くのエネルギーを費やしてきたような気がしている。小論文を書くために求められるのは、辞書的な語意にとどまる言葉学習ではなく、背景を理解認識するための言葉学習である。

私は過去に、「小論文を書く」過程について、次のような論理を持って指導してきた。

感じる・・・まず何らかの感情のゆさぶりからスタートするはずだ

↓

知る・・・それによって問題意識を持てば知識欲につながる

↓

考える・・・知識と感情を整理することで論理が生まれる

↓

書く・・・ここまでの過程を経て初めて他者に発信する表現となる

このように考え、左部分を板書し、右のように解説してきた。ところが、生徒の生活や話すこと書くことの現状を知るにつれ、しだいに「感じる」と「知る」は逆でなければ彼らには通じないのではないかと思うようになった。彼らは、まず「感じない」のである。そしてそれはあまりにも「知らない」からである。

今、生徒に必要なのは

言葉とその背景を知らしめる

↓

知ることによって感動を呼び起こし問題意識を持たせる

↓

背景を持った言葉の活用によって論理を形成し、他者に発信する言葉を持つ

という図式による指導ではないかと考えている。

「小中高の教科学習の中で培った知識や学力を基礎として、日常生活で養われた教養や常識を持って、自己を掘り下げ広く社会を見渡し、正や負の感動に心揺さぶられる高校生」は既に数少なくなったが、「高校教養科」が第一段階として目指すのはそのような高校生の育成であろう。しかし、現状、現実に無関心無感動な彼らの心揺さぶるためには、背景を持った言葉の学習によって、事実現実を理解認識させていかなければならないのである。

さらに、それらの言葉とは、大きく「知的背景」「社会的背景」「哲学的背景」を持った3種の言葉として括れるのではないかと現時点では考え

ている。

3-3、今後の課題

小論文指導の高校教科としての確立を目指すわたしの狙いは、本稿でひととおりに示すことができた。

しかし、現場発信ゆえの論証力の不足を自ら感じ、今後は次のような課題の論証とともに、実現への方向性を探っていきたいと考えている。

- ① 入試小論文からうかがえる大学の視点として示した「I~VI」の、高校教育における意義と可能性の論証
- ② 大学の「一般教養」との連携による「高校教養科」のあり方
- ③ それを実現するカリキュラム
- ④ 生徒の現状と、私がおこなっている「小論文授業」の紹介

【参考文献】

- 井上尚美 (2007) 『思考力育成への方略』 明治図書
- 勝野頼彦 (2004) 『高大連携とは何か』 学事出版
- 絹川正吉 (2006) 『大学教育の思想』 東信堂
- 竹内常一 (他) (1995) 講座高校教育改革① 『高校教育は何をめざすのか』 旬報社
- 長尾達也 (2001) 『小論文を学ぶ』 山川出版社
- 難波博孝 (2008) 『母語教育という思想』 世界出版社
- 西研/森下育彦 (1997) 『考えるための小論文』 筑摩書房

本稿は、長岡裕子 (2010) 全国大学国語教育学会 第119回鳴門大会、および (2011) 第120回京都大会研究発表論文の改訂によるものである。